

# だから職員が辞めていく ダメな施設を選ばないために 6

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2014-09-17<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 岡田, 耕一郎, 岡田, 浩子<br>メールアドレス:<br>所属:     |
| URL   | <a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/218">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/218</a> |

# だから職員が辞めていく

ダメな施設を選ばないために



6

老人ホームという組織が「家」として「家」を家とする、というところを目指す方向として、「家」「家庭」あるいは「疑似家族」と言われることがあるが、介護業界から一歩出ると（つまり普通の社会で）「家」なら、必然的にそこには家族がいなければならぬ。危ないものと受け止められている。普通の仕事として老人ホームを選ぶ際には、疑似家族的組織になっていないかチェックしてみたほうがよさそうだ。

これらの言葉はユニットケアを説明する際にしばしば使われるので、ユニットケア推進論者の声に耳を傾けてみよう。利用者と介護職の濃密な家族的な関係を強調する論者として武田和典の見解を取り上げ、つき

それを否定する論者の見解を取り上げることにしたい（いずれも『ユニットケアのすすめ』筒井書房刊を参照）。

武田和典によると、「ユニットケアは、『施設をいくつ]かのグループに分けて小規模化する形態』のこと」であり、「その中には流れ作業的なケアではなく、『生活を一緒にしていく』というケアを目指す展開が含まれている」とい

う。利用者と職員に分別して、それぞれがその場所

岡田耕一郎（おかこういちろう）  
経済学博士、経営学博士、社会学教授、日本サービス産業論、介護マネジメントの研究者。

岡田浩子（おかだひろこ）  
福祉士、著『老トの手』、2017年、福祉社出版。

はならないのか、それともわがまま勝手に行動してユニットの疑似的家庭を崩壊させる家族としてあるまでも許されるのかは、そのユニットを支配する職員の裁量に負うところが大きい。利用者は「疑似家族」にあこがれる介護職員の心の透き間を埋める道具になっている。そのためそれに協力する利用者は、介護職員の助けによって自らの生命力を豊かにすることができるとは思えないが、介護職員のいうことを聞かない職員は、奇妙なものに

利用者は虐待されて生命力がしぼむことになるかもしれない。つまり、こういうことがもつれない。「愛と連帯」を標榜した東由多加（1945〜2000）、劇作家・演出家、東京キッドブラザース主宰）が亡くなった今においては、「疑似家族」思想はもはや廃れてしまったかのようになっていたが、その残滓は介護の世界でくすぶり続け、ユニットケアとして新たな「愛と連帯」が再生したのだ。

他方、ユニットケア推進者の中には、そのような幻想に嫌悪感を示すものが多い。たとえば、外山義は「日本人の持っている家族のイメージに近づけようとする、その分職員の負担が大きくなりますよね。家族の間に関係を深くしていかなければならない」と職員は追い込まれていく気がするのです。「家族」の概念の中にある「親しさ」と、職員の概念にある「労働」とのバランスを、まだ日本はうまく整理できていないのではないのでしょうか。：疑似家族化が美化されすぎているのではない

## 小規模ケアの出口なき迷路

利用者や職員との関係について、大熊由紀子は「ベタベタするような関係は築く必要はないと思います」と言い、高橋誠一は「ある種の緊張感を伴っている、だからこそ個室が必要になっていこうと思っんです。日

利用者と職員の関係について、大熊由紀子は「ベタベタするような関係は築く必要はないと思います」と言い、高橋誠一は「ある種の緊張感を伴っている、だからこそ個室が必要になっていこうと思っんです。日

本宅老所・グループホームが家族になっちゃうのは個室が重要視されないからなんです」と言う。ユニットケアに憧れる職員がいる一方で、識者はかなり以前から「家」「家庭」「疑似家族」を問題視しているようだ。

さて、これまでの説明で、就職先としてユニットケア施設を見た場合、それ

ほど単純にお勧めできるものではないことが理解してもらえたと思う。

問題なのは疑似家族という価値観がユニットケア運動に参加する介護職員を洗脳し、その職員たちが疑似家族という幻想を追い求める強力なマシンになり、ユニットピア実現のために利用者や支配者になる点である。もちろん、職員たちは自分たちがユニットの利用者を支配している女王様であるとは全く思っていないのだが、結果的にその小さな組織全体をコントロールしているのは職員たちであり、実質的に彼らが世界の創造主であることに変わりはない。ユニットとは、あたかもベンサムのパノプティコン（全てが丸見えて監視される刑務所）であり、職員を「全てを見通す力」を持った女王様にもしてへくれるのだ。

したがって、ユニットケア施設に就職することとは、実は別の見方をすると、「愛と連帯」の戦士になることであり、さらに女王様にもなることである。そうやってしまつて、その「世界」の住人になってしまひ、もはや「こっちは、世界には戻って来れなくなるかもしれない。

このように、疑似家族幻想を中心に、現在、極めてスリリングな「そっち」の世界の介護現場が日本中に増殖しつつある。ユニットケアは明らかに価値観の迷路に入ってしまった。出口の見えないユニットケアの明日は、どっちだ。